
ビジネスソング

新参

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ビジネスソング

【Nコード】

N7235Y

【作者名】

新参

【あらすじ】

20代後半にさしかかったホテルマン雄介。やりがいを見つけれないまま仕事を続ける毎日に疑問を持つようになる。帰り道の途中、雄介の独り言から地下鉄の中である一人の女性と出会う。

その出会いは雄介に何をいくつ気づかせてくれるのだろうか。

「ああ、おれって何やってんだろ」

帰りの地下鉄の中、そんな愚痴を一人でこぼしてしまふことが最近多くあった。地下鉄の広告には「転職ノススメ」などと書かれたものが大きく目立っていた。

今の雄介には、主婦たちがお昼の通信販売の番組を見て、それをすぐに買いたくなってしまう気持ちがよくわかる。というのも、最近読んだ本の中で、目的のない毎日の中では、何か大きな広告だったり宣伝されたりするとそれを信じ込んでしまうことがあるらしい、とあったからだ。目的がはっきりしていないときに宣伝媒体を見ると、その広告で推されている商品だとかサービスというものを「使う」ことが目的となり、新しくできた何かに向かう自分が現れ、それを目標を持つ自分と勘違いするから……らしい。だが勘違いだったとしても何かに向かって行きたい、そう考える人がすがりつくとしたら、藁なんかではなくそこらへんにぶら下がっている広告なのかもしれない。

その目標製造機たる広告に光る「転職」という文字が、今の雄介にはまぶしすぎた。

長時間勤務、その割に安月給、昇給もなかなかない。高校卒業とともに飛び込んだホテル業界は、華やかな表舞台とは違いかなり厳しいものである。

理不尽なことで怒鳴られることも多くあったが、人間関係という意味で言えば、みなフランクでなじみやすい職場だった。

なんだかんだ勤続9年目、今年で27歳になる。30代になつてからでは転職も難しいかもしれない。その思いが雄介を焦らせているのは事実だった。

「なんでこの業界入っちゃったかなあ」

「みんな仕事のこととで悩むんですね」

自分の独り言にまさか返答が来るとは思っていない雄介は、その声のするほうを向いた。

先ほどまで車両に自分しか乗っていないなかったので気づかなかつたが、席一つ分を開けてまだ20代前半くらいのほっそりとした女性が疲れた顔で座っていた。

「独り言、少し大きかったですかね」

「私が聞こえる程度には」

と女性は笑いながら答える。すみません、と謝る雄介に女性は、そんなことないですよ、と手を振った。

「おんなじ悩みを抱えている人っているんだなあって、そしたら自分でも気付かないうちに声をかけちゃったんです。」

「お仕事で何かあったんですか？」

雄介は見ず知らずの女性にそんなことを聞くのは失礼かとも思ったが、聞かずにはいられなかった。

「私保険会社の営業やっています。」

そう話し始める彼女からは、自分と同じような匂いを感じた。

「短大を出て、すぐに就職。自分で言うのも何なんですけど、給料も良いし、人とお話して契約を取るといっものはやりがいのある仕事でもありました。」

自分にやりがいのあった時期ってあったらどうか。雄介は自分と照らし合わせていた。

「1年が過ぎたあたりからですかね、ゆがみ始めたのは。なんだか営業の成績とかそういうものを押し付けられるようになってきて

「

「ああ、それは営業で働く人にはよくある話ですよね」

「はい、私も最初は覚悟していました。なんですけど…、最近では上司にその実績とか取られるようになって」

「え、それはどういことですか？」

「私には直属の上司がいるんですが、営業成績はその上司を通して幹部のほうに行くんです。その時に『これは私も関係していたから』といって契約を自分が取ったように上へ報告してしまうんです。そんなことしていたら、いくら契約を取っても成績が上がるわけないですよ」

女性の顔は見る見るうちに暗くなつていくが、話を止める気はないようだ。雄介もその話に耳を傾ける。

「そして何より悩んでいるのが、必要としていないお客様にも契約を取りに行かないといけないことなんです。これって営業としては当たり前なのかもしれないんですけど、やっぱり私は割りきれなくて」

女性はためらうようにいった。

「本当はお客様の笑顔が見たいから、無理な契約交渉に行くのはすぐくつらいんです」

なるほどな。雄介は完全にその女性の話に聴き入っていた。そして気付いたことが一つ。自分も人に喜んでもらいたいという理由からこの職業を選んだということだ。

高校卒業前、これ以上勉強する気になかった雄介は就職することしか考えていなかった。どんな職業に進むのかも決めず、ただ漠然と求人情報を探していた。

そんなときに目に飛び込んできたのが、今現在働いているホテルである。そのキャッチコピーには「あなたも一緒に笑顔を作りませんか」と書かれてあった。

ホテルマンというと聞こえがいいしかっこいいかも、と迷わず応募した雄介は、今思えば目標の何もない時期に甘いキャッチコピーに誘われた勘違いした一人だったのかもしれない。

ふと女性顔を見てみると、今にも泣きそうな顔をしている。

「ちよつと待った。泣くのはまだ早い。ちよつと待ってくれ」

「お話したら気持ち軽くなっちゃって」

「気が楽になったのなら嬉しいけど、泣くのは勘弁。君のような子に泣かれちゃうとどうしたらいいか分からなくなる」

そのとき車内アナウンスが終点の駅の名前を告げた。

「終点まで来ちゃったけど大丈夫？おれはここだからいいけど」

「あ、あたしもここなんです」

まだあどけなさの残る彼女の顔にやられたせいもあるだろう。

「そりゃあ奇遇だね。じゃあ、もう少しどこかでお話の続きをしようか。次は明るい方向に向かう話で」

なんて、雄介は口走ってしまった。見ると女性はうつむいている。しまった、時期草々だったか。

「こんなに愚痴こぼしちゃっていいんですか」

うつむきながら、上目づかいに尋ねるこの子にNOなどとは言えない。雄介はちよつとおちゃらけたように言った

「君におれの逆さになった本ばかり並ぶ本棚から見つけた言葉を贈るよ」

「え、なんですか？」

「『泣きたきや泣けばいい。我慢が一番辛いんだ。とりあえず荷物を降ろそうぜ、名前と一緒に』」

女性は笑う。

「今の私にぴったりな言葉ですね。というよりお名前も確認していなかったところまで」

「あ、今の嘘だよ。おれが即興で作ってみた」

二人で笑う。なんだー、嘘かー、と言って笑う彼女の笑顔はきれいだっただ。

この笑顔をずっと見ていたいなあ、なんてちよつと短絡的すぎるかな。

今からどこ来ましょうか？と女性はまた上目づかいで尋ねてくる。それが意図的なものと分からないほど鈍感ではない。

雄介は歩幅を合わせて、その女性と地下街をすり抜けて行った。

自分の悩みはどこ行っただけ。
いつのまにか消えちゃったよ。
君が気づかせてくれた「誰かを喜ばせたい」という気持ちのおか
げかな。

その「誰か」の一人目は君になってもらおう、そう決めるまで時
間はあまりかからなかった。

これも新しい目標なのかな？と気づくには少し時間がかかった
ようである。

おわり

(後書き)

このお話は全てフィクションです。なので、現実とは異なる部分が多々あるかもしれませんが、筆者の想像だと思ってください。伝えたいことと現実とは異なる部分が多いのです。

始めて投稿させてもらったので、コメントいただけると嬉しいです。私の精神はガラスのハートですが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7235y/>

ビジネスソング

2011年11月21日23時57分発行